

23日に記念リサイタル、ソプラノ 豊田喜代美



「日本の心を西洋音楽で歌うことは日本文化のアピールにもなります」©Eichi Uemura

今年、公式演奏歴50年を迎えた大ベテランのソプラノ歌手、豊田喜代美が23日、東京・赤坂のサントリーホール・ブルーローズでリサイタルを開く。取り上げるのは、昭和初期に国際的に活躍した早世の作曲家、貴志康一（1909～37年）の歌曲。その魅力について聞いた。（松本良一）

オペラから宗教音楽まで幅広いレパートリーで半世紀にわたって聴衆を沸かせてきたスター歌手が今、ライフワークとして心血を注ぐのが、貴志の知られざる作品を紹介することだ。

「1987年に初めて歌曲をオーケストラと共演し、メロディーと歌詞の見事な一体

Class C

貴志康一の歌曲伝えたい

感に魅了されました

大阪に生まれた貴志は、少

年時代からバイオリンで才能を発揮し、17歳でスイスに留学。後に大指揮者フルトベン

グラーの知己を得て、34年にはベルリン・フィルハーモニ

ー管弦楽団を指揮して大きな評判となつた。35年に帰国後、

指揮活動を本格化させたが、28歳で病を得て没した。

貴志は滞欧中、作曲家として様々な作品を発表し、特に

オーケストラ伴奏付きの日本

歌曲は高く評価されたとい

う。「日本語の発音を西洋音

楽の語法にうまく融合させ、マーラーの歌曲に通じるよう

な生き生きした音楽に仕上げ

ている」。そして、その音楽

を聴くと、浪花節に通じるものがあると感じた。「日本の

音楽家として欧州の聴衆に曰

本人の心情を届けようという使命感があつたのでしょうか。今回はピアノ伴奏で、すでに知られている「赤いかんざし」「花売娘」「かざかき」などのほか、自筆譜から新たにソプラノ、バイオリン、ピアノ用に編曲された西條八十作詞の「大島おけさ」と源実朝の和歌による「春の歌」を世界初演する。「欧州人から『まるでオペラ・アリアのよう』と評された歌を楽しんでほしい」

今後は、貴志が別名で発表し、ほとんど忘れられていたジャズやブルース風の歌にも光を当てたいと考えている。「音楽の力を通して歌い手と聴き手両方の人生を豊かにしたい。それが今の目標です」と抱負を新たにする。貴志のうたごころを現代によみがえらせる取り組みに注目したい。

午後2時開演。演奏は、澤和樹（バイオリン）、渡辺健二（ピアノ）。
6・1831。

（03・379